令和４年度第１回きこえエール新潟勉強会　質疑応答

「難聴児と共に歩む～難聴通級指導教室の立場から子どもたちを支えて～」

講師　糸魚川市立糸魚川東中学校通級指導教室

教諭　久我　かおり　様

５月 29 日当日の質問

Ｑ ： ＜片耳難聴のお子さんと通級指導教室について ： 医療関係者＞

病院で診ているだけだと分からないような子供の様子を教えていただき、すごく勉強になりました。片耳難聴児に対する支援はまだまだ少ないと思います。小さいうちはまだいいのですが、大きくなると、支援を希望しないケースも多いのではないかと思います。どのような片耳難聴児だったら支援が必要とか、このような片耳難聴児だったら無理に支援しなくても良いなど、経験上分ることがあれば教えてください。

Ａ ： 久我先生より

支援の方法はそれぞれ違ったとしても、どの子供にも支援は必要だと思っています。

今まで経験した中では、保護者が支援を希望しないケースは結構ありました。しかし、困るのは保護者ではなく子供本人です。そのような場合は子供自身がどう思っているのかを大事にするようにしています。できれば最初に親子別々に面談をする時間を取って、子供自身がどう思っているのかを聞いたり、通級指導教室ではどのような支援ができるのかを伝えたりしています。子供が興味を示せば、保護者の思いは違っても協力してもらうようにします。**子供がどうしようかと悩んでいるときは焦らないようにして、無理に通級するように促すことはしませんが、その後もつながるようにはしています。**

通級指導教室での指導開始時は、「顔見知りになる」ことが目的なので、年齢が低ければ特に「遊ぶこと」が中心になります。「通級に行ったら、楽しかった」と思ってもらえればいいのです。だから、月 １ 回がせいぜいで、場合によっては学期に１回しか来ない子もいますが、**とにかくつながっていることが大事**だと考えています。回数は少なくても繰り返し通ってくると、だんだん、自分で左右の聞こえ方の違いが分かってきます。子供たちは小さい頃から聞こえにくいことは何となく分かっていますが、「聞こえにくいって何か」までは分かりませんし、「右と左が違うようだ」ということは分かっていても、小さい頃は困り感など分かりません。でも、3，4年生くらいになると、自分の聞こえを意識できるようになってきて、座席も「こっちの方がいいかも」と感じるようになってきます。

学年がもう少し上がって来ますと、聴力測定器を使って、「右から聞こえる音が左で聞いたら大きさが違う」というような左右差を意識させて「やっぱり左右の聞こえ方が違う」という学習につなげ、そこから先は「みんなの中にいるのであれば、こういうふうにすると便利だよね」とか「受験の時はこうした方がいいんじゃない」などの相談につなげています。

このような経験を通して、通級指導教室で学習してきた子は、中学を卒業した後や、大人になって片耳難聴のことを**周囲の人に言うことに対して抵抗感が少ないのではないか**と思っています。**通級に来ている子供たちは「チャンスがあれば言う」という子が多いのです。**しかし、学習をしていなくて不安だけを感じている子は「チャンスがあっても言いたくない」というふうにならないかなと心配しています。実際のところは通級で学んだ子はまだ少なく、その先は分からないのですがそんなふうに思います。**自信をつけるといいますか、別に聞こえにくくても、「こんなふうにすると上手くいく」とか、「こんな工夫しようかな」とか、「周りの人に言っておいた方が便利だな」とかそういうことを考えることができれば、通級指導教室に来ている価値があるのかなと思っています。**